

アーカイブ 通信 No.18

No.18

2020.3.1

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
◆tel: 042-540-1663 (事務局)
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)
E-mail: simin-siryu@nifty.com
www.c-archive.jp
〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)
◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ

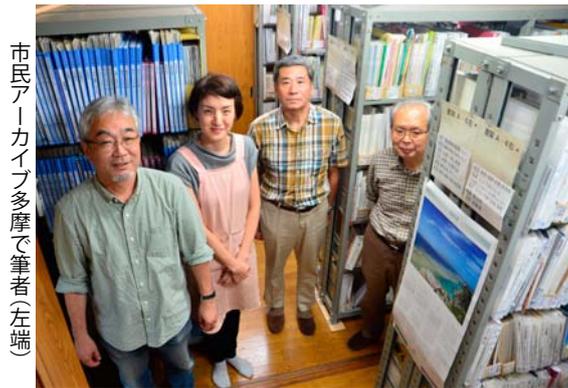
市民アーカイブ多摩の記録冊子作成中

これからの5年を 見すえるために

杉山 弘 (ネットワーク・市民アーカイブ運営委員)

◆節目の年に、冊子を編む

市民アーカイブ多摩にも、まもなく6度目の春がやってくる。隣接する雑木林にある山桜の梢から、来館者の頭上に白い花びらが舞い散る日々も、そう遠くはないはずだ。資料の受け入れや、配架のルーティンに忙殺されるうち、知らぬまに移ろいゆく



市民アーカイブ多摩で筆者(左端)

春もあつた。うっかりしていると、開設から5年の節目も、それと気づかぬまま、やり過ぎてしまひそうだ。「節目だからこそ、あえて5年先を見すえてみたい」と、運営委員の1人が言った。「それならば、市民アーカイブ多摩の現在を知るべきだし、これまでの経緯をふり返ることも必要だろう」と誰かが応じた。

市民アーカイブ多摩の、来しかたゆく末を1冊にまとめるという着想が、こうしたやりとりから生まれた。この春には刊行に漕ぎつけたいと、運営委員皆で奮闘している。冊子は、3部からなる。第1部は「ようこそ、市民アーカイブ多摩へ！」とした。開設までの経緯やその後の活動、そして今後の展望を文章と写真で表現したい。所蔵している資料

開館6周年記念講演会を開催します

5月24日(日)午後2時30分～ 立川市子ども未来センター

「労働・ジェンダー問題を伝える —竹信流資料深掘り法—」



竹信三恵子さん(ジャーナリスト・和光大学名誉教授)

市民活動資料センター「市民アーカイブ多摩」とその運営団体である当会の6周年を記念し、講演会を開催します。

お話しいただく竹信三恵子さんは、長年、ジェンダー差別や労働問題を追い、伝える仕事を続けてこられました。個々の問題にどのようにめぐり合い、なぜそのテーマを扱うのか。それを第三者に伝える時、どのように資料を見つけ、分析などに活用するのか。そして、広く伝えることで社会的に攻撃された時はどう対抗するのか。

公文書をはじめとする資料の取り扱い方に大きな問題が指摘される今、私たちがどのように資料を活用していけるのかを一緒に考えます。

ご参加お待ちしております。

先した。

さらに催しの一覧や『アーカイブ通信』の記事一覧、運営委員がしたためてきたアーカイブに関する論稿や活動報告などの文献一覧も、第2部に収めた。

冊子の対象、つまり読者をイメージしてみた時に、市民アーカイブ多摩の関係者(内部)を想定するのか、それとも市民一般(外部)かという議論になり、あげく「どちらも」との結論に落ち着いたことがあった。関係者であつ

てもなくても、手にとつてもらうことを考慮したのが、第3部である。

所蔵するおよそ1800タイトルの資料目録だ。すでにホームページでも公開しているが、あらためて冊子に掲載するのは、心づもりがあった。まずは、目録こそが、公共図書館や文書館などに冊子を備えてもらう条件と判断したこと。そして人びとの眼にふれる書棚に冊子を置いてもらえれば、きつと市民アーカイブ多摩の利用に繋がるはずと、考えたのである。

目次案

第1部 ようこそ、市民アーカイブ多摩へ！

* 市民アーカイブ多摩とは

* 開設までの経緯

* 所蔵資料と分類のあらまし

* 開館日の風景

* 『アーカイブ通信』

* さまざまな催し

* 市民アーカイブ多摩のこれから

から

第2部 年譜と資料、データで

たどる

* 年譜

* 資料

* データ一覧

第3部 所蔵資料目録

◆「保存」から「活用」へ

冊子作成の担当になったので、いつものルーティン作業からは外れ、市民アーカイブ多摩にかかわる文書の探索や整理に精出した。さまざまなファイルに綴じられた文書をいったんバラバラにして、時系列に並べなおす。そして、それぞれの記述に目を通し、取捨選択する作業は、性にあうのか、なほどの苦勞も感じなかった。おかげで、市民アーカイブ多摩の足跡を、細部にわたりたどることができた。ぼくがかかわりをもつ以前の、手探りの時代のことを知った。

その頃から市民アーカイブ多摩の開設までには、優に10年を越す月日を要したことになる。当時、ダンボール箱500箱分のミニコミなどが、廃棄されるかもしれない事情にあった。社会的にも歴史的にも価値があるものだから、ぜひ保存したいが、どうすればそれは可能なのか。ぼくたちをとらえて放さない、悩ましい「保存」問題だった。

2014年4月に市民アーカイブ多摩を開設できたことで、状況は一変した。ようやく「保存」が実現し、ほっと一息をついたが、やがてぼくたちは、

あらたな課題をかかえることになる。資料の「活用」をめぐる問題である。

2019年1月に「市民活動資料を活用するー市民アーカイブ多摩の今後をみずえて」と題して、シンポジウムを開催した（本紙15号参照）。懸案が「保存」から「活用」へとシフトしたことを象徴している。

さて、所蔵する資料の「活用」を議論し、それを促進する試みは、冊子刊行後を期することにしよう。ここでは、昨年のシンポジウム以降「活用」をめぐる、ぼくが思い迷っていることなどを記し、覚え書きとしたい。

ミニコミやピラなどから、どのような情報を得て、活かすのかは人それぞれであり、だから資料の「活用」は基本的には個人的なことからであると、ぼくは思う。シンポジウムのパネラーの発言が、おしなべて「わたしは、こんな風に活用している」という内容だったことにも、それは示されている。

いろいろな活用事例が、パネラーから紹介されたが、あえて整理すると、①歴史や社会を描く際の手がかりとしてミニコミやピラなどを読み込むというものと、②それらから社会運動や市民運動の主張や行動提起をうけとり、行動の選択に役

立てるといふものにと、大別できると思う。ただし実際には①と②とは、厳密な区別をできないし、同じ個人にあつても、時に②であり、またある時は①の活用を試みる、というのが実情だろう。

①は学問的で専門的な活用だが、実はこうした活用はイメージしやすい。一方②については、ぼくの表現それ自体がこなれず、洗練されていないよ

うに、いまだそのイメージはつきりしない。

市民アーカイブ多摩には、②の活用のイメージをより鮮明にしてゆく責務がある、とぼくは思う。もちろん、①も②も、どのような活用も大歓迎だが、それを促してゆくためには、まず自分たちがそれぞれの活用を実践してゆくこと、そしてその事例を伝えてゆくことが大切ではないだろうか。

市民アーカイブ多摩の四季④

春 ナシ

葉より先に花が出てくる不思議。冬芽の中ではどんな準備が練り広げられているのでしょうか。



虫たち

に攻撃されること
なく息吹
を堪能で
きるこの
季節は来
館日和です。

春になるとウメに始

まり、アンズ、サクラ、モモなど、バラ科の樹木が次々と開花します。その中でナシは、真っ白な花弁と赤紫色の雄しべのコントラストが鮮やかで、くつきりとした雰



(邑田仁・むらたじん)

元東大小石川植物園園長

1970〜80年代の

日韓連帯運動を読む

李美淑さん(立教大学助教)

1970〜80年代に日本で起きた日韓連帯運動はどのような運動であり、どのような意味を持ったものであろうか。

同時代を生きていた人々は「政治犯」救援運動などで記憶に残っているかもしれないが、その次の世代はどうであろうか。同運動に参加した当事者の記録物や書物を越えて、より学術的に日韓連帯運動を分析し、記録し、継承する必要があるのではなからうか。そんな問題意識をもって、私は研究を進めてきた。

その成果として2018年に『日韓連帯運動』の時代―1970-80年代のトランスナショナルな公共圏とメディア―(東京大学出版会)を刊行し



日韓連帯運動は、80年代半ばからは日韓

◆日本の民主主義を求めて

た。拙著に基づいた上で、運動の概観、トランスナショナルな情報交換のネットワーク、そして、研究における市民活動資料の調査と整理などを中心に報告した。

◆日韓連帯運動

日韓連帯運動は、ベトナム反戦運動など「アジア」に眼を向け始めた時期、韓国の民主化運動に触発されながら、日本社会を変革しようとした運動である。

在日韓国人をはじめ、キリスト者、知識人、文化人、学生を含む活動家たちが、韓国の民主主義回復と統一促進を求める運動、対韓(対朝鮮)政策の変更を求める運動、(在日)韓国人「政治犯」救援運動、反公害輸出反対運動、キーセン観光(買春観光)反対運動、民族差別撤廃運動などを緩やかで緊密なネットワークを保ちつつ形成していた。

た。拙著に基づいた上で、運動の概観、トランスナショナルな情報

関係の問題でありながら、日本の民主主義の根源的な問題として、植民地支配と戦争に対する責任を真正面に取り上げていくこととなる。韓国の民主化運動への支援、連帯を求めると同時に、日本の民主主義を求める運動でもあったのである。

◆トランスナショナルな情報交換のネットワーク

日韓連帯運動の形成と展開の背後には、国境を越える市民たちの情報交換ネットワークがあった。拙著では、とりわけ、キリスト者のネットワークを中心に、情報交換の過程と

その政治的含意を分析した。韓国の民主化運動陣営の地下情報(声明文や地下レポートなど)がひそかに宣教師などにより日本と世界に送られ、また日本と世界からの情報やメッセージが韓国に入っていた。そこには問題意識の共有や応答が行われ、国家の枠組みを超えた1つのトランスナショナルな言説空間、または公共圏を形成していたことがわかった。

◆市民活動資料の調査と整理

本研究における市民活動資料の収集と整理における困難も共有した。研究手法として

第6期緑蔭トーク

2020年度も多士済々の顔ぶれで緑蔭トークを開催します。

- ・会場：市民アーカイブ多摩(立川市幸町5-96-7/8頁に地図)
- ・時間：午後4時15分〜6時
- ・参加費3000円

◆第1回 4月25日(土)

「オリンピック開催の前と後」いちむらみさこさん

◆第2回 6月27日(土)

「人を耕す、地域を耕す」ミニコミ発行し続けて40年」林 喜代三さん

(グループ目高舎)

◆第3回 7月25日(土)

「日本近現代政治史料の収集と公開」堀内寛雄さん

「憲政資料室での経験から」堀内寛雄さん

(元国会図書館憲政資料室職員、日本近現代史料調査・研究)

◆第4回 10月24日(土)

「自治体社会教育機関の地域資料収集・提供・保存の意味」荒井敏行さん

(元国立市公民館長)

運動当事者への聞き取り調査とともに、各当事者が持っている資料を集め、整理・分析するようなものであった。その点、資料の収集と整理には限界があった。

今後、日韓連帯運動を含め、日本とアジアにおけるトランスナショナルな社会史に対する関心が高まることと、資料収集と整理・分析の手法に関する議論も広がることを願う。

(記・李美淑 立教大学グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター・助教)

2020年度

ネットワーク・市民アーカイブ定期総会

- ・日時 5月24日(日) 午後1時15分〜2時15分
- ・会場 立川・子ども未来センター2階
- ・会員対象(当日、会員になっていただいても参加できます)。
- ・検討議案
- ・2019年度活動報告
- ・2019年度決算報告
- ・2020年度活動計画
- ・2020年度収支予算
- ・2020年度運営委員・幹事選出
- ・会員活動交流

※2020年度会員、運営委員を募集しています。

問い合わせ：TEL 042-540-1663 E-mail:simin-siryon@nifty.com



「ふんふん」紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を、発行者の方に紹介していただきます。

The Gallery

発行は「相模原市議会をよくする会」。

子どもの学校問題に取り組み、教育委員会を傍聴していた主婦3人の呼びかけで1999年に発足しました。教育問題を市民全体で解決するには、市長部局や教育委員会が一堂に会して議論する市議会の傍聴が必要と、マスコミの手を借りて一般市民に呼びかけたのです。呼びかけに集まった市民は男女30数名。それまでの傍聴者は女性ばかりで、解決を訴えても埒が明かない状況で、男性が集まったことは喜ばれました。

翌月には会の結成を正式に決定しようと約20名が集まり、会の名称と機関紙『The Gallery



- 1999年創刊、1000部、A4判、8～16頁、年4回発行。
- 第78号(2019.5.19)で終刊
- tel:090-6346-8620 (赤倉)
- 当館所蔵：1～78号、臨時特集号「市議会議員の通信簿」6号
- ▽78号内容＝会活動への伝言、相模原市議会への伝言、会活動を支えた報道各社、報道転載、読者の声、ごあいさつ

(傍聴席)の発行、代表者などを決定しました。Galleryは定冠詞Theを付けると欧米では議会に相応しいと考えました。

初めて議会を傍聴した時の驚きは今も忘れることができません。厳粛で緊張感に包まれているというイメージは完全に崩れたのです。

会の中心的活動である傍聴は、本会議、5つの常任委員会、適宜設置される特別委員会を正会員(年会費2千円)が分担して行い、賛助会員(同千円)は傍聴はできないが資金援助で協力するとしました。正会員15名、賛助会員30名(最多時は60名も)が常時会の運営に携わりました。

1. モットーは「市民の知る権利に尽きる」。
2. 会は、不偏不党、中立・公正な立場を守る。
3. 会の目標は、二元代表制(市長、議会が別々の選挙による代表)による理想の行政組織

ふんふん

発行元の「八王子手をつなぐ女性の会」は1988年9月に「男女平等社会」の実現をめざし創設された。発足総会後ただちに「発足総会は大成功!みんなの力で記念イベントを盛り上げよう」とニュース1号を発行。その記念イベント「いきいきと暮らす女と男の社会って?」の報告を載せた2号。そして翌年6月の3号から、機関紙の名前が『ふんふん』となった。「女と男はファイティ・ファイティ!」

の実現。

4. 『The Gallery』を年4回(定例市議会の翌月・千部)発行。
 5. 「市議会議員の通信簿」を4年毎の統一地方選挙直前に発行(四千部、市内公民館中心に配布、HPにも掲載)。これが全国の先駆け、20年の活動の特徴的成果とされた。
 6. 「市民が開く市議会報告会」、国政選挙・市長選挙の際に「公開討論会」を主・共催。
 7. 市議会の民主的・効率的運営のための提言。
- 会の中心的メンバーが高齢化し、2019年5月に解散しましたが、市議会上に一定の役割を果たしたと自負しています。(赤倉昭男)



- 1988年創刊、120部、A4判、6～8頁、年3回発行。
- 年会費2,000円
- 連絡先 tel:090-6147-1257
- E-mail:info@marute.net
- 当館所蔵：57号～(欠号あり)
- ▽94号内容＝八王子で開催! Colabo「私たちは『買われた』展」報告、講演会報告、沖繩スパイ戦史上映会報告、八王子市「男女共同参画条例」制定へ動き出す、活動記録他

からこの名がつけられた。

発足当初から男性も含め約120名を超える会員が集まり、当時八王子に6人いた女性市議会議員が全員党派を超えて参加した。89年「女性のための八王子プラン」策定、90年に「女性行政係」が初めて設置された頃のことである。

この「プラン」(現「男女が共に生きるまち八王子プラン第三次」)を有効あるものにするために、2019年度まで約30年間、男女平等に関する「予算並びに施策に関する要望書」を八王子市に提出してきた。

また世界の動きにも目を向けながら、互いの生き方を大切にする社会をめざし、学習会・講演会・映画会など、さまざまなことに取り組んでいる。02年からはDV被害者支援活動も始め、週1回の電話相談と月2回のDV被害者サポートグループ活動を行っている。

『ふんふん』は、これらの会の活動内容だけでなく、男女平等に関する最新の情報を会員に届けるように心がけている。最近では選択的夫婦別姓を求める集いの案内と報告。日の丸・君が代に関する処分問題。平和と平等を守るための「憲法」。3・11東日本大震災のことも「核の問題」「災害と女性」という視点で特集ページを組んできた。

会員が3回連載(1回は約1300字)で自分の活動・体験などを自由に書くシリーズも好評で長く続いていた。「私の好きなジエnderフリー① 沢田研二」「慈愛寮・婦人保護施設のこと」「終の棲家、何処に!」「イタリア周遊三週間」「昭和という時代を駆け抜けて」などなど、これまで20人近くが登場した。残念ながら現在は休載中。広報担当は4名。発行日までいつもぎりぎりの綱渡り。会員の他に市の男女共同参画センター、図書館、関係団体などにも送っている。(小野慶子)

市民アーカイブ多摩の資料棚から ⑫ 〈社会教育〉

資料分類70番台は「教育」で、分類75は「社会教育」である。

市民活動は、教育的側面を常に内包しており、全ての活動が社会教育実践とも言える。「社会教育の推進」は、NPO法人格取得要件の17の活動の1つでもあり、個別分野の活動とともに、該当する活動として指定する法人も多いが、主活動にしている法人は少ない。75番に分類しているミニコミを紹介する(終刊も含む)。

【学びを活動の中心に】

まず分野にこだわらず「学び合う」ことを中心に据えている市民団体の通信である。『たまげさ』(TAMA市民塾)、『学報』(東京雑学大学)、『菜の花つうしん』(ヤドカリハウス)、『自学』(八王子生涯学習インストラクターの会)、『ゆうひろば』(さつぽろ自由学校・遊)、『シュレ大学紀要』(東京シュレ)、『エル・ネット』(オーブンカレッジ)、『News』(高等教育情報推進協議会)などがある。それぞれ、学習会や講座の予告や報告、講師紹介や共に考えたいことなどが掲載されている。

【社会教育を自分たちで】

1946年7月に文部次官通牒「公民館設置運営について」が出され、全国各地で公民館設置が

始まった。都市部は遅れるが、東京多摩地域でも市民による公民館や図書館設置運動が広がった。当時の運動の通信は多くが法政大学環境アーカイブズに移管して保存されている。

その流れに続く市民の社会教育を考える会や90年代以降の行政改革による施設や職員縮小、事業委託などに取り組んでいる通信を収集している。『国分寺・社会教育の会』(同会)、『息吹き』(茅ヶ崎の社会教育を考える会)、『公民館をよりよくする会だより』(同会・西東京市)、『調布市公民館を考える市民の会会報』(同会)、『公民館有料化NO!!ニュース』(相模原公民館有料化を考える市民調査チーム)、『公民館を考える三多摩市民の会』(同会)他。

【ネットワーク・研究組織】

広く社会教育の連絡組織としては、『日本の社会教育実践』(社会教育推進全国協議会)、『三多摩社会教育つうしん』(社会教育推進協議会三多摩支部)、『社全協東京23区支部通信』(同会)など。

研究機関としては、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会、日本社会教育学会、日本公民館学会、三多摩公民館研究所、月刊社

会教育編集委員会、立正大学社会教育ゼミナール、社会教育デザイン研究社などの紀要や会報も所蔵。

【市民が運営に参加する】

公共施設の中でも公民館、図書館、博物館などの社会教育施設は、法令上で市民による運営審議会などの設置が位置づけられて



おり、運営や事業に関わる市民の組織も作られることが多い。

『阿佐ヶ谷市民講座』(阿佐ヶ谷市民講座実行委員会)、『光とひと』(国分寺市光公民館運営審議会)、『わいがや通信』(障がいをしていても自立する会・喫茶わいがや)、『くにたち公民館運営審議会傍聴ニュース』(市内3団体による発行)、『シネマサロンニュース』(国分寺市立もとまち公民館シネマクラブ)、『公民館利用者ネットワークニュース』(同

会・あきる野市)、『日野公運審だより』(日野市中央公民館)、『手をつなぐ』(国分寺市恋ヶ窪公民館利用者連絡会)、『公民館って、おもしろい』(国分寺市立本多公民館運営審議会)、『トリターマ』(東京都公民館連絡協議会)、『並木公運審だより』(国分寺市立並木公民館運営審議会)他。

【地域情報が豊かな公民館報】

そして、この分類で一番多いのが公民館報である。各施設の催しなどを中心にした内容が多いが、地域の人や団体、サークルを知る重要な情報源でもある。

『こたいら公民館だより』(小平市中央公民館)、『小金井 月刊こうみんかん』(小金井市公民館)、『あきしま公民館だより』(昭島市公民館)、『西部公民館だより』(調布市西部公民館)、『東部公民館だより』(同東部)、『北の杜通信』(同北部)、『たのしいまちー公民館通信』(多摩市立永山・関戸公民館)、『くにたち公民館だより』、『図書室月報』、『コーヒーハウス』(国立市公民館)、『げやきの樹』(国分寺市公民館)、『公民館だよりひの』(日野市中央公民館)、『こんには公民館』(立川市中央公民館)、『東久留米こうみんかん』(東久留米市中央公民館)、『まちだ中央公民館だより』(町田市公民館)、『月刊ゆとろぎ』(羽村市生涯学習センターゆとろぎ)など。1世紀近い歴史を持つ民間の社

会教育団体(財)社会教育協会発行の『スマイルタウン』(日野)も。多摩地域以外でも公民館活動に熱心な『まつもと公民館報』(松本市中央公民館)、『市民が編集委員会をつくり作成している』(館報・上鶴間) (相模原市立上鶴間公民館)、『館報みなみ』(相模原市大野南公民館)なども所蔵。

【広域社会教育情報】

都や市レベル全体の社会教育情報誌もある。『とうきょうの地域教育』(東京都教育庁生涯学習スポーツ部)、『社会教育情報』(大田区教育委員会社会教育部)、『ふあいんどーきつかけづくり情報誌』(多摩市教育委員会生涯学習部)、『一郷一学通信』(群馬県総務局地域創造課)、『生涯学習N A V Iー町田市の生涯学習情報誌』(町田市教育委員会生涯学習部)、『ふちゅう東西南北・生涯学習だより』(府中市生涯学習センター生涯学習ボランティア)、『めぐろ新鮮生涯学習情報』(目黒区教育委員会生涯学習課)、『ざらり・たちかわ』(たちかわ市民交流大学市民推進委員会)など。憲法26条の教育を受ける権利を保障するのは、学校教育だけでなく社会教育も担っているのだが、その権利保障は、地域によって大きく異なっていることがミニコミからも見えてくる。(江頭晃子「運営委員」)



恵まれたこの日、JR新秋津駅前からの徒歩による参加者を含め総勢16名が集会した後、多磨全生園の見学を開始しました。

◆運動の節目を経て、残る課題

多磨全生園が全生病院として開設されて110年、ハンセン病の元患者に対する国の賠償責任を認める判決が19年に確定し、運動はひとつの節目を迎えました。

しかし「隔離と偏見」と



いうテーマは、さまざまに異なる形をとりながら、今も私たちが乗り越えるべき課題としてあります。国立ハンセン病資料館元学芸部長で、重監房資料館部長を現在務める黒尾和久さんのご案内で、私たちは多磨全生園の森のなかを歩き出しました。

最初に訪ねた納骨堂には、園内で亡くなった約4500人のうち、2000人以上の遺骨が引き取られないまま、ねむっています。すぐ向かいには、国の責任を問う検証作業の過程で発見された胎児の標本を供



養した「尊厳回復の碑」がひっそりとたたずんでいます。偏見ゆえに新しい名前で入所せざるを得なかった人々の本名を、碑に刻むことが今でもまだ難しいことを聞き、問題の根深さを痛感しました。

◆晩秋の静かな午後、森で

過酷な「生」を強いられてきた患者さんたちが自らの記録を残す実践から始まった資料保存の活動は、全国のハンセン病療養所の入所者が共有する博物館施設「高松宮記念ハンセン病資料館」へとつながり、2007年には現在の国立ハンセン病資料館へと展開してきました。



森で紡がれた言葉と思想は、地の底から静かに静かに、私たちに語りかけてきます。

◆たがいの末に守られた資料とともに

しかし、今は当たり前のように展示されている資料も、実際には多くのたがいの末に残され、守られてきたことを、黒尾さんの説明から学ぶことができました。そして、資料や施設を残すたがいは、今も終わってはいません。過ぎ去った過去をただ振り返るためではなく、未来を構想するためこそ、人びとの生きた証を今に伝える資料は価値をもつ。この点を改めて実感できたのは、やはり「現地」ゆえであったと思います。終了後は新秋津に場所を移し、感想を共有する機会をもちました。

ご案内くださった黒尾和久さん、当日の参加者の皆さまに、感謝を申し上げます。「ネットワーク・市民アーカイブ」では、市民活動資料の意義を再確認するため、今後も機会をとらえ「現場を訪ねる」試みを継続していきたいと思っています。

(町村敬志 運営委員)

※山下道輔著・柴田隆行編『ハンセン病図書館』(2011年、社会評論社)

苦難の時代を生き抜いた人びとは、喜び、苦しみ、怒り、そして理想をさまざま形で語り、また文字や絵で表現しようとしてきました。それらが生まれた「現場」は今どうなっているのか。

「シリーズ〈現場〉を訪ねる」企画として、本年は「隔離」の森で紡がれた言葉と思想に耳をかたむける―多磨全生園・国立ハンセン病資料館を訪ねて―というテーマで、多磨全生園と国立ハンセン病資料館を訪ねてきました。

2019年11月17日、晴天に

記憶と記録の場をめぐる旅 ⑮

今井館 聖書講堂・資料館

—内村鑑三の思想を今に生かす

自由ヶ丘駅から10分ほど歩くと堅固な趣をたたえている2つの建物にたどり着く。

教会にいろいろ付随してきた権威・権力を克服する「無教会主義」（教会や聖職者を置かない）を唱えた内村鑑三とその思想を生かす聖書講堂と資料館である。2008年には開館100周年を迎えている。

ネットワーク・市民アーカイブの今後の運営基盤強化を考えるにあたり、市民が運営している資料館などのご経験・工夫や苦勞を伺うため、昨年12月13日に会員10名で訪問。両施設を運営しているNPO法人今井館教会の荒井克浩さん、坂内宗男さんにご案内いただき、お話を伺った。

◆非戦論と聖書研究

内村鑑三は1861年に江戸小石川に生まれ、1878年札幌農学校在学中に新渡戸稲造らと共に洗礼を受けた。第一高等中学校の教員在職中、教育勅語奉読式で最敬礼し



聖書講堂(左)と資料館(右奥)

なかったことが旧刑法下では「不敬」にあたるのではないかとされ、職を辞している。この「不敬事件」後は『万朝報』の主筆として社会評論を次々と発表し、足尾の鉱毒反対運動に参加したり、日露戦争で「非戦論」を展開したりするなど、社会運動家としても活躍している。1900年には『聖書之研究』を創刊し、研究を進め、30年3月に内村が逝去するまで357号発刊されている。

◆聖書の真理を追い求める

住宅街の道路に面したレンガ造りの石段を上ると、正面に今井館聖書講堂、右手に棟を別にした資料館がほぼ同じ高さで屋根を並べている。2棟とも木造建築であるが、趣はどっしりとした飾りの少ない洋風な建物の印象である。

聖書講堂は平屋にしては屋根の高い薄茶色の壁にかまれている。1907年に大阪の香料商、今井樟太郎の妻信子から内村への献金によって建てられ、当時は内村の自邸内の柏木（現北新宿）にあったという。この講堂で内村は終生、聖書の真理を説きつづけている。35年に区画整理によって取り壊しを迫られ、弟子たちの奔走によって現在の地に移築した。十字架や祭壇がある教会ではなく、聖書を学び研究する場、集会施設である。

◆刊行物に記し・伝える

資料館は、ヒノキ造りの開放的な建物である。1階は事務所、2階は開架式閲覧室で、配架は2つに分けられている。1つは無教会信仰を選んだ生きた方々の著書を中心にキリスト教に関連する著書の

棚で、蔵書数は約1万冊。

もう1つは無教会信仰の活動を伝える刊行物を収蔵している。伝道に大きな役割を果たした約250種に及ぶ個性豊かな雑誌が製本されて配架してある。無教会主義の活動は雑誌発刊によって運動が展開しているため、雑誌類、パンフレットなどは運動を明らかにする貴重な資料になる。国内外の研究者がこの資料館を訪れている。

開架式で誰でも閲覧できるが、蔵書類を借りるためには維持会員になることが条件とされていた。分類は閲覧者の便を図る方針からアイウエオ順に落ちついたとのことであった。2階には蔵書類の他に写真、額装された内村の書、ハンダール訳された著書が展示されている。閲覧用の机もあり、訪れる人が調査しやすいように配慮されている。

◆市民運営の悩みや工夫

土地賃借料の負担増のため、今年から数年かけて文京区への移転が決定していることなど財政運営や資料収集増・整理の悩み、NPO法人格取得の際の困難や工夫など、率直なお話を伺うことができた。



資料館内

特にボランティアの関わり方は、当会にとっても大変参考になった。

明治以降の歴史、非暴力による平和の追求、無教会主義、社会問題と向き合う活動拠点となってきた講堂と資料館を訪れることを是非お勧めしたい。（鈴木清隆＝運営委員）

今井館 聖書講堂・資料館

- ・所在地：東京都目黒区中根 1-14-9
- ・連絡先：tel・fax:03-3723-5479
E-mail：304kyoyu@imaikankyoyukai.or.jp
- ・アクセス：東急線都立大学駅徒歩7分、自由ヶ丘駅徒歩10分
- ・開館時間：10：00～16：30
- ・開館曜日：月・水・金曜日（夏季冬季休館あり）
- ・入館無料（貸出しは会員のみ）
- ・http://www.imaikankyoyukai.or.jp

※あなたの地域の資料館情報をお寄せください。

アーカイブ多摩 日記

◆「全林野文化資料室」資料移管

同資料室は、林野庁の現業職員で組織していた全林野労働組合の組合活動と文化活動関連の資料ダンボール約80箱を所蔵していました。1989年に森林労働へ改組したのち、廃棄の危機にあった資料を当時、文化部長兼国際部長だった木村和雄さんが町田市の自宅庭にログハウスを建てて開室。ご高齢になり、資料を大阪のエル・ライブラリー（本紙17号参照）へ移管するため、当会も梱包ボランティアにお邪魔しました。資料から、日本の林業と労働組合をベースとする文化活動の豊かさを垣間見ることができました。

◆土曜日開館の危機

現在7人の運営委員等が月6〜7回の開館日（1日2人）に従

事していますが、4月より1人減となり、土曜日の開館日に入る当番が不足します。現在月2回の土曜日の開館日を1回にする案も出ています。ご協力いただける方はぜひご連絡ください。

◆2020年度会員募集・継続のお願い

小さな資料室ですが、市民の多様な思いと行動が詰まった貴重な資料室です。1人でも多くの方に支えていただくことで継続できます。新規ご入会、ご継続、どうぞよろしくお願ひします。運営委員も募集しています。

◆樹林開放は3月29日

当館はNPO法人グリーンサンクチュアリ悠が保全する保護樹林地内にあります。3月29日（日）10時から12時まで解放され、10時30分から1時間、豊泉喜一さん（立川民俗の会）によるお話「玉川上水の謎」もありませう。ぜひお来しください。

運営委員会など

- 10月18日 第7回運営委員会、参加者9人。会員・カンパ者、当番確認、利用者報告（毎回）、茨城に保管中の書架処理方針、次年度の開館日、冊子掲載内容、次年度緑蔭トーク講師、著作権法解説、通信、早瀬さん講演会タイトル検討他。
 - 11月15日 第8回運営委員会、参加者7人。ご寄付経過と反省。ハンセン病資料館訪問分担任、冊子執筆分担任、総会講師、早瀬さん講演会事前学習会、今井館訪問検討他。
 - 11月17日 〈現場を訪ねる〉第4回「ハンセン病資料館」参加者16人。
 - 12月13日 NPO法人今井館教友会訪問・見学。参加者10人。
 - 12月20日 第9回運営委員会、参加者6人。年賀状案、開館日・運営委員会日程、年末カンパ、訪問報告・反省、冊子執筆分担任、総会記念講演会タイトル、資料学習会他。
 - 12月26日 早瀬昇さん講演会事前学習会。参加者5人。
 - 1月17日 第10回運営委員会、参加者7人。早瀬さん学習会役割分担任、20年度定期総会準備日程確認、記念講演会内容検討他。
- ※3月の運営委員会は3月13日です。

会員数（2020年1月）

- ・146人（正会員59、賛助会員87）
- ◆新規入会ありがとつ
- ・賛助会員 眞壁繁樹さん

カンパありがとう

（2019年10月〜20年1月）
手嶋孝典さん、林喜代三さん（治代さん）、横田順子さん、匿名1人

会員からの年賀状より

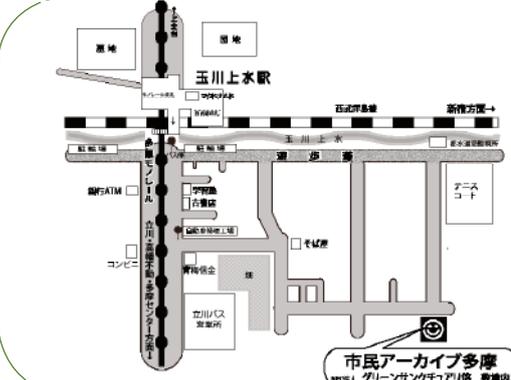
- ・今年も緑蔭トーク参加も兼ねて顔出します。宜しくお願いします。
- ・皆様のご努力に感謝いたします。「うれしかった19年のニュース」具体的でいいですね。特に30歳以下会員が2人増加したこと、希望が湧きます。今年もどうぞ一層のご活躍で。希望をひとつひとつ積み重ねてください。
- ・貴重な活動をされていることに刺激を受けております。
- ・いつも通信をありがとうございます。

訃報 安東 恣さん

昨年12月28日、病氣のため逝去されました。享年75歳。フリージャーナリスト。阪神淡路大震災や東日本大震災時に現地でも活動したり、フォーラム色川など、さまざまな市民活動も主導。当会の運営委員を2014〜15年度に務められました。ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

開館してから6年が経つ。先日朝日新聞に、昨年の講演会にお招きした瀬畑源さんの『公文書管理と民主主義』が紹介されていた。捨てられるもの、残すもの。今私たちが物事を見極めることの大切さを痛感する。「踊らされる」のではなく、自ら意志をもって「踊る」のでありたい。（鈴・増・江・佐）



市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（8月中旬・年末年始の休館あり）
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9 6-7
（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分）
- ・tel & fax：042-536-5535（電話は開館中のみ）
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報など）1,800タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp